

古代中世における辺地修行のルートについて

寺内 浩（愛媛大学法文学部教授）

Routes to remote places for ascetic training during the ancient and medieval periods

Hiroshi TERAUCHI

Professor, Faculty of Education, Ehime University

古代中世の四国では、僧侶や修験者によって辺地修行が行われていた。以下では、そのルートをめぐって二つの憶測を述べていくことにしたい。

一つめは、古代の官道との関係である。官道とは都と全国（畿内・七道）の国府を結ぶ道路のことであり、8世紀初頭までに幅10m前後の道路が全国に敷設された。官道が整備された主目的は、中央・地方間の情報

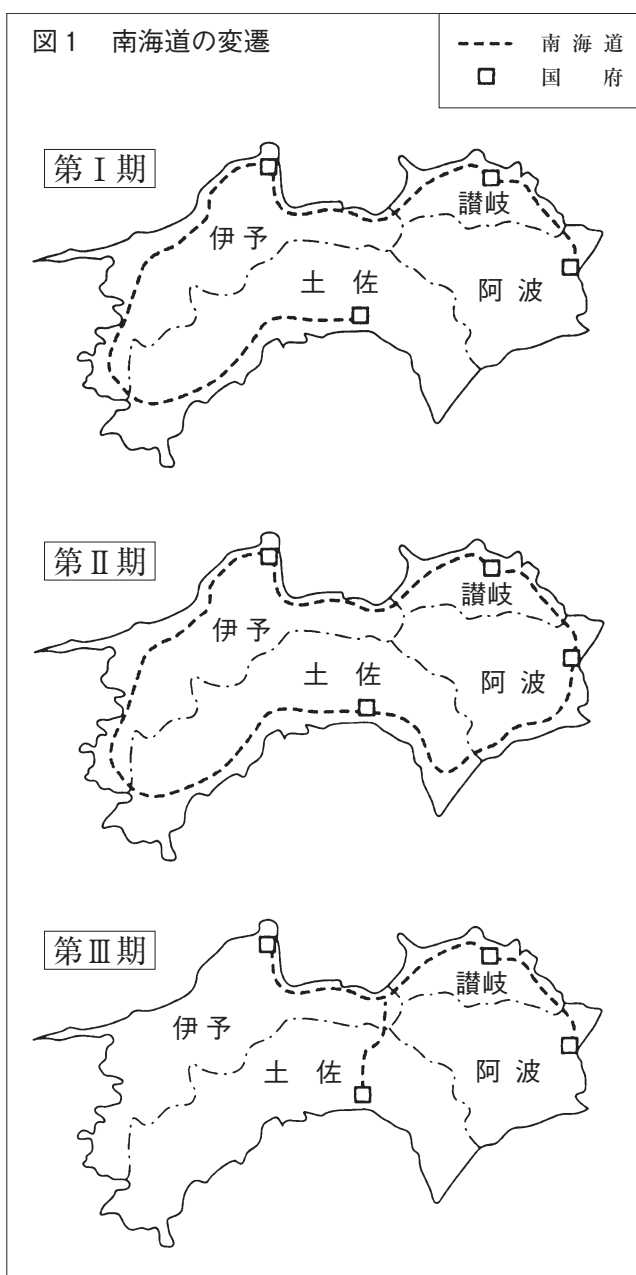
伝達をすみやかに行うことにあったが、一般の人々の往来や物資の輸送にも官道は利用されていた。

四国の官道、すなわち南海道は、ルートが2回にわたり変わっている（図1）⁽¹⁾。最初の第Ⅰ期のルートは、阿波国府、讃岐国府、伊予国府から四国の西部沿岸をまわって土佐国府に至るルートで、718年（養老2）まで続く。第Ⅱ期は、718年～796年（延暦15）の時期で、Ⅰ期のルートに加えて、阿波国府から土佐国府に直接つながるルートが開かれる。つまり、「四国環状路」の時期である。第Ⅲ期は、796年以降の時期で、四国山脈を横断するルートが開かれたことにより、「四国環状路」の多くが廃止され、土佐国府には瀬戸内側から直接行くことになった。

このうち、第Ⅱ期、すなわち奈良時代から平安初期のルートがのちの遍路道に近似していることは図1をみれば明らかである。もちろん、88の札所を結ぶ遍路道は近世になってからのものだが、平安時代後期には「海辺の廻り」（『今昔物語集』31-14）とされる四国の海岸部を巡る辺地修行者の修行ルートがあったことは周知の通りである。では、奈良時代の「四国環状路」とこの「海辺の廻り」につながりはあったのであろうか。

さて、空海は15歳の時（788年）都に上り、その後大学に入って勉学に励むが、一人の沙門に出会ったことにより、仏教者としての道を歩み始める。空海は大学をやめて四国に戻り、仏道修行を行う。空海の『三教指帰』には、石鎚山、大龍嶽、室戸岬で修行をしたとあるので、四国各地を移動しながら修行をつづけたらしい。奈良時代の仏教界には、こうした山林などで修行に励みながら各地を巡る僧侶が多かった⁽²⁾。「少年の日、好んで山水を渉覧」した空海もそうした修行者の一人だったのである（『続遍照発

図1 南海道の変遷



揮性靈集補闕抄』巻9)。

平安時代になると密教の隆盛により僧侶の山林修行はさらに活発化する。9世紀に四国各地で山林修行をしたのが真如(高丘親王)である。真如は861年(貞観3)に南海道に向かうが、同年の上表文に「諸国の山林を跋涉し、斗藪の勝跡を渴仰す」ことを願うとあり、空海と同様に四国の各地で修行をしたようである(『三代実録』貞観3年3月30日甲辰条、同元慶5年10月13日戊子条)。

奈良時代には空海と同じく四国の各地を移動しながら修行に励む僧侶が多くいたと考えられる。そうした修行者は移動の際に「四国環状路」を利用することもあったであろう⁽³⁾。また、「四国環状路」は人々、物資、そして情報が行き交う場だったので、その付近には役所などの諸施設や寺院が建てられることも多かった。地方の寺院や堂で行われた法会のための文集とされる『東大寺諷誦文稿』には、「今此の堂は里の名、某甲の郷、此の名を某という。(中略) 駈路・大道の辺にして、物毎に便有り」とあり、寺院や堂が「駈路・大道の辺」に設けられていたことがわかる⁽⁴⁾。そして、寺院ができるとその近辺の山林や海岸に修行地も設けられたであろう。こうして「四国環状路」は、それが存在した約80年の間に、多くの辺地修行者に利用され、またその近辺に寺院や修行地が設けられたことにより、自ずからそれに沿う形で辺地修行のルートが形成されていったのではないだろうか。そうすると、平安時代に入ると「四国環状路」は廃止されるが⁽⁵⁾、四国各地での山林修行が盛んになるなかで辺地修行者のルートは残り、それが「海辺の廻り」となっていったと想定することもあながち不可能ではないように思われるのである。

二つめは、大辺路・中辺路・小辺路についてである。これらがみえるのは下記の弘法大師の伝記である⁽⁶⁾。

(1)『奉弘法大師御伝記』(1688年(元禄元))

その後、四国八十八ヶ所の札所を立てさせたまう、坂の数は四百八十八坂、川の数に四百八十八川、惣て四百八十八里也、大辺路七度、中辺路二十一度、小辺路三十三度罷成也

(2)『弘法大師空海根本縁起』(1699年(元禄12))

始て辺路を三十三度、中辺路を七度させ給

真念の『四国辺路道指南』に、「大師御辺路の道法は四百八十八里といひつたふ、往古は横堂のこりなくおがみめぐり給ひ、陰阻をしのぎ、谷ふかきくづ屋まで乞食させたまひしがゆへなりと云々、今は劣根僅に八十八ヶ所の札所計巡拝し、往還の大道に手を拱御代なれば、三百有余里の道のりとなりぬ」とあるように、八十八ヶ所成立以前の辺地修行の時代には、88の札所以外の霊験地も修行者は巡っていたらしい。こうしたことから、大辺路・中辺路・小辺路について、胡光氏は、「中辺路」は八十八ヶ所巡り、「大辺路」は八十八ヶ所成立前からある「辺地修行」の系譜を引く広範なものであって、むしろ奥深い山へ踏み込むことが多かったとし、「小辺路」はのちに各地で何ヶ所参りと呼ばれるようになる地域的な巡礼としている⁽⁷⁾。

このうち、大辺路・中辺路については基本的に支持できるが、小辺路については賛成できない。同じ辺路なのに、大辺路・中辺路は四国を巡り歩くが、小辺路だけ特定の地域しか巡らないとするのは疑問である。また、中世においては、辺地修行が、「修験之習」(「仏名院諸司目安案」といわれるように、修験者の修行体系に組み込まれており、その修行をしたことがステータスになっていた⁽⁸⁾)。故に、辺地修行の時代に、大中小の違いはあっても、四国の四か国を巡らないものを辺路と呼んだとは考えがたい。したがって、大辺路と中辺路の違いが、訪れる聖地・霊験地の数にあるのならば、小辺路も、同じく四国を巡り歩くが、訪れる聖地・霊験地の数が中辺路より少ないものとすべきであろう。

この点に関連して注目されるのが、八十八ヶ所の成立期あるいはそれ以前においては、いくつかの抽んだ札所が存在するという近年の研究である。伊予の石手寺が1676年(延宝4)に発行した通行証明を紹介した町田哲氏は、石手寺(伊予)、善通寺(讃岐)、白峰寺(讃岐)、地蔵寺(阿波)、太龍寺(阿波)、最御崎寺(土佐)、竹林寺(土佐)、金剛福寺(土佐)の八ヶ寺が遍路者の通行を保証していたとしている⁽⁹⁾。また、阿波の持明院が発行した1658年(明暦4)の廻り手形を紹介した武田和昭氏は、竹林寺(土佐)、石手寺(伊予)、白峰寺(讃岐)の三ヶ寺が各国を代表して保証をしていたとしている⁽¹⁰⁾。さらに、六十六部の巡礼地が八十八ヶ所に影響を与えているとする小島博巳氏は、太龍寺(阿波)、竹林寺(土佐)、大宝寺(伊予)、善通寺(讃岐)は六十六部の中世以来の重要な納経所であり、「あえて臆断するならば、八十八ヶ所は、中世以来の六十六部の有力な納経所であった太龍寺・五台山・菅生山・善通寺を核として、それらを結ぶ行程にあった諸巡拝所を特定するかたちで整備されたと考えられないであろうか」としている⁽¹¹⁾。

このように、当初の八十八ヶ所にはいくつかの抽んでた札所、他と異なる重要な札所が存在していた。故に、そうした札所を中心に巡る修行形態も想定できなくはないのであり、小辺路なるものがあつたとするならば、このようなものであつたと推測されるのである。

註

- (1) 内田九州男・寺内浩・川岡勉・矢野達雄『愛媛県の歴史』53頁（山川出版社、2003年）。「四国環状路」については、足利健亮「山陽・山陰・南海三道と土地計画」（『新版古代の日本4 中国・四国』角川書店、1992年）を参照した。なお、近年四国の各地で古代の道路遺構が発掘調査により見つかっている（内田他前掲書、木原克司「南海道—讃岐国—」（『日本古代の交通・交流・情報3 遺跡と技術』吉川弘文館、2016年）、高知新聞web版2018年12月14日など）。
- (2) 当時の僧侶が寺院内だけでなく山林で修行していたことは、藺田香融「古代仏教における山林修行とその意義—特に自然智宗をめぐる—」（同『平安仏教の研究』法蔵館、1981年、初出は1957年）に詳しい。また、『日本霊異記』には各地を巡り修行する僧侶の話が多くみえている（上22の道照、下16の寂林、下24の恵勝など）。
- (3) 僧尼令には、僧侶が道路で高位者に出会ったときの規定がある。
- (4) プライアン・ロウ「古代寺院のネットワークと人々」（『シリーズ古代史をひらく 古代寺院』岩波書店、2019年）。
- (5) 9-10世紀になると、ほとんどの官道は維持ができなくなり、廃絶する。
- (6) これらの伝記については、武田和昭『弘法大師空海根本縁起』の内容と成立背景—四国八十八ヶ所辺路成立をめぐる—（同『四国辺路の形成過程』岩田書院、2012年、初出は2007年）を参照した。
- (7) 胡光「四国八十八ヶ所霊場成立史論—大辺路・中辺路・小辺路の考察を中心として—」（『巡礼の歴史と現在—四国遍路と世界の巡礼—』岩田書院、2013年）。
- (8) 大石雅章「四国遍路と弘法大師信仰」（『四国遍路と世界の巡礼』第1号、2016年）、長谷川賢二「四国遍路の形成と修験道・山伏」（『四国遍路と世界の巡礼』第3号、2018年）。
- (9) 町田哲「五番札所地蔵寺と四国遍路—札所寺院の文化財基礎調査から見たこと—」（『遍路文化を活かした地域人間力の育成』鳴門教育大学、2010年）。
- (10) 武田和昭「明暦四年の四国辺路廻り手形」（同『四国辺路の形成過程』岩田書院、2012年、初出は2011年）。
- (11) 小島博巳「六十六部巡礼地再考—八十八カ所の成立とも関わらせて—」（『四国遍路と世界の巡礼』第4号、2019年）。